

第5章 現在の和歌山と将来



和歌山を代表するスポーツ選手

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	

我が国スポーツ界の功労者

和田フレッド勇（1907～2001）は、アメリカ生まれの日系二世（フレッド・イサム・ワダ）で幼年期を御坊市で過ごしました。戦後、アメリカに遠征した日本選手団に自宅を宿舎として提供するなどの援助をしています。東京オリンピック招致委員に選ばれ、欧州や中南米の国々に東京開催の協力を求めて自費で巡り、1964（昭和39）年の第18回東京オリンピック競技大会の実現に大きく貢献しました。その他、多くの功績により国際オリンピック委員会（IOC）から「IOCトロフィー」が贈られました。御坊市初の名誉市民です。



和田フレッド勇

日本サッカーの創設者

中村覚之助（1878～1906）は、那智勝浦町出身で、1902（明治35）年東京高等師範学校（現筑波大学）に在学中、イギリスの「アソシエーション・フットボール」を訳しルール解説書をつくり、ア式蹴球部を立ち上げました。これが日本でのサッカー（当時はア式フットボールといった。）の始まりです。（財）日本サッカー協会のシンボルマークは、日本にサッカーを紹介し普及に尽力し、29才の若さで急逝した氏の故郷熊野の霊鳥「八咫鳥」を図案化したものといわれています。



中村覚之助

日本人女性初の金メダリスト

兵藤秀子（旧姓：前畑 1914～1995）は、橋本市出身で、第10回ロサンゼルスオリンピック競技大会（1932年）で銀メダルを獲得し、次の第11回ベルリンオリンピック競技大会（1936年）の水泳競技200m平泳ぎで金メダルを獲得しました。その時のラジオ実況放送「前畑ガンバレ」の絶叫アナウンスに日本中が熱狂し、今も語り草となっています。引退後は、日本最初の「ママさん水泳教室」や「中高年水泳教室」を開くなど生涯を水泳の指導、普及に尽くしました。アメリカの水泳殿堂入りを果たし、オリンピック功労賞を受賞。1990（平成2）年には女性スポーツ界初の文化功労者となりました。



兵藤秀子

友情のメダル

西田修平（1910～1997）は、那智勝浦町出身で、第10回ロサンゼルスオリンピック競技大会（1932年）と第11回ベルリンオリンピック競技大会（1936年）で銀メダルを獲得しました。特に、ベルリン大会で

はアメリカの選手と堂々とわたりあい5時間を超える戦いの末、同記録の大江選手と2位、3位を分け合いました。この時の銀と銅のメダルを半分ずつ合わせた「友情のメダル」の話は人々に感動を与え、教科書でも紹介されました。その後も、(財)日本オリンピック委員会(JOC)委員や第18回東京オリンピック競技大会の陸上競技審判長など数多くの要職を務め、日本のスポーツ振興に力を尽くしました。1988年に那智勝浦町から名誉町民の称号が贈られています。



西田修平

体操ニッポンを支える郷土の先輩

早田卓次は、1940年田辺市で生まれ、第18回東京オリンピック競技大会(1964年)の体操競技において、日本男子チームの団体総合優勝の原動力となり、個人種目「つり輪」でも金メダルを獲得しました。その後も多くの国際競技大会に出場し、日本代表として活躍しました。引退後は、日本代表チームのコーチや団長として後進の指導にあたり世界の舞台で活躍する競技者を育てています。現在も、(財)日本オリンピック委員会(JOC)や日本ユニバーシアード委員会委員長などの要職にあり、体操競技をはじめ、広くスポーツの振興と発展に尽くしています。



早田卓次



わかやまの知識



【国民体育大会(国体)】

国体とは

国体は、都道府県持ち回りで、毎年開催されている国内最大かつ最高の国民スポーツの祭典です。

法令に明記された大会で、スポーツ振興法第6条には、「国民体育大会は、財団法人日本体育協会、国及び開催地の都道府県が共同して開催する。」とあります。

「本大会」「冬季大会」の競技の得点の合計を競う都道府県対抗方式で行われ、天皇杯(男女総合成績第1位)・皇后杯(女子総合成績第1位)の獲得をめざし、都道府県代表の選手が熱い戦いを繰り広げます。

国体の目的は、広く国民の間にスポーツを普及し、スポーツ精神を高揚して国民の健康増進と体力向上を図り、併せて地方スポーツの振興と地方文化の発達に寄与するとともに、国民生活を明るく豊かにしようとするものです。

和歌山県での国体

和歌山県は、1971(昭和46)年に「黒潮国体」と名付けた第26回国民体育大会を開催し、男女総合成績(天皇杯)で優勝を果たすとともに、女子総合成績(皇后杯)でも第2位を収めました。県内各地で繰り広げられた花いっぱい運動や選手のホームステイ(民泊)、ブラジル日系選手の特別参加など、工夫をこらした取り組みは、参加者から大変好評でありました。国体後には、県民総参加スポーツ大会が始まり、県内でもスポーツ活動が盛んになりました。

2015(平成27)年には、44年ぶりに和歌山県において第70回国民体育大会を開催する予定です。和歌山を元気にする国体の実現をめざして、現在、県民の皆様方や市町村、競技団体とともに準備を進めています。